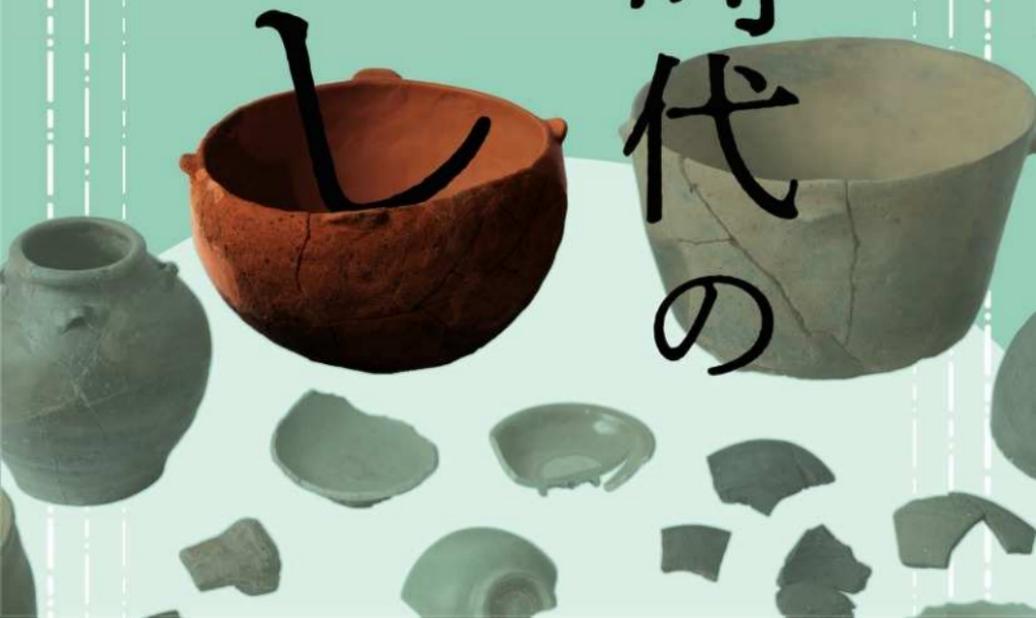


グスク時代の 暮らし



目次

ごあいさつ	1			
1. グスク時代とは	2			
①中国産・本土産の陶磁器の流通	②農耕・牧畜の普及			
③集落	④グスクの出現			
	◆沖縄県「グスク時代」の歴史年表			
2. 器	4			
①白磁	②カムイヤキ	③滑石製石鍋	④鉄鍋	⑤土器
⑥青磁	⑦褐釉陶器	⑧青花	◆コラム「形を似せた土器や陶磁器」	
3. 食と生業	12			
①当時の食べ物	②当時の暮らし	③当時の道具		
4. 生活の場	16			
①沖縄諸島（伊佐前原第一遺跡、普天間後原第二遺跡、喜友名下原第二遺跡）				
②宮古諸島（新里元島上方台地遺跡）				
③八重山諸島（新里村遺跡／◎東遺跡・◎西遺跡）				
5. 飾りと祈り	24			
①簪	②玉	③その他（ビード・有孔製品・垂飾）		
◆コラム「鏡 歴史を映すもの」				
取り扱った遺跡・引用文献・参考文献	28			

【凡例】

本図録は、企画展『グスク時代の暮らし』の展示を補完するものとして、編集・作成しました。展示会の運営は大城妃左緒、企画・原稿執筆は奥平大貴・廣岡 凌・馬上理恵子が行いました。また、本誌編集・デザインは山城英莉・並里千佳（補佐）が行いました。文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。発掘調査報告書に記載されている資料名と、本図録に記載されている資料名が一部異なる場合があります。これは新たな研究成果によって、詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

グスク時代は、沖縄県域における先史時代に後続する時代で、12世紀頃から16世紀初頭、日本本土の平安時代末から室町時代に相当します。この時代は、沖縄の社会が階級社会へ移りかわる時代で、^{あじ}按司と呼ばれる領主の出現や、グスクと呼ばれる城塞の築城など、沖縄県の歴史の中でも大きな画期となった時代です。また、沖縄本島周辺や先島地域では中国産・本土産陶磁器が流通し、農耕や畜産が普及するなど、一般の人々の生活にも大きな変化がありました。

そこで今回開催する企画展「グスク時代の暮らし」では、遺跡から見てくるグスク時代における一般の人々の生活に焦点をあて、「器」や「食と生業」、「生活の場」、「飾りと祈り」といったテーマに分けて、遺物や写真パネルを用いてその暮らしぶりを紹介します。

今回の展示を通して、多くの方々が、グスク時代の人々の暮らしに思いを馳せ、現代の我々の生活との間に共通点や差異を見いだすことで、現代と過去のつながりを実感していただくとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める機会となれば幸いに存じます。

令和4（2022）年10月12日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 前田 直昭

1. グスク時代とは

グスク時代とは、弥生～平安並行時代（貝塚時代後期）の後に続く時代で、先島諸島では歴（原）史時代の新里村期から中森期の半ば頃にあたります。時期については諸説ありますが、おおよそ12世紀から16世紀初め頃で、日本本土の平安時代末から室町時代にあたります。グスク時代は、按司と呼ばれる有力者の出現による

階級社会への移り変わりや、漁労・狩猟採集中心の生活から農耕・畜産を行う生活への移行など、社会や生活のさまざまな側面で大きな変化が起こります。

各地に出現した按司が勢力圏の統廃合を繰り返し、国家を築いていく様子は、琉球王国の形成段階といえます。

グスク時代の主な特徴

① 中国産・本土産の陶磁器の流通

グスク時代の前の時代にあたる貝塚時代後期は、主に土器を食器や煮炊き用の道具として使っていました。

グスク時代になると、沖縄諸島や宮古・八重山諸島で作れない陶磁器などの製品が島外から持ち込まれ、島に住む人々の生活が大きく変わっていきます。

また、島外の製品の形を真似た土器を作り、使用しますが、時期が下ると中国産の陶磁器が多く使われるようになります。

② 農耕・畜産の普及

グスク時代になると、鎌やへら、鍬などの鉄の農具が普及し、農耕が定着します。この時代の遺跡からは、生産された米、麦、粟などが炭化した状態で確認されます。また、牛や馬の骨も出土することから、家畜を用いた農耕を行っていたと考えられます。

③ 集落

グスク時代の集落に住む人々は、地面に穴を掘って柱を立てた、掘立柱の建物に住んでいました。住んでいる場所の近くには、穀物を保管する高床式の倉庫や、水田・畑がありました。当時の集落に住む人々は、農業を中心とした生活を営み、集落は今でいう農村のような風景だったのかもしれませんが。

④ グスクの出現

「グスク」は時代の名前にもなっており、この時代の代表的な遺跡です。13世紀後半頃から造られはじめ、その数は200～300と考えられています。多くのグスクは石積みや堀など、外敵から守ることを意識した施設を持ちます。グスクの起源については、城（按司の拠点）、聖域、集落など様々な説があります。

同じ時期の宮古・八重山諸島では、石積みが屋敷を囲う集落が営まれます。

沖縄県「グスク時代」の歴史年表

西暦	1100年	1200年	1300年	1400年	1500年	1600年	
沖縄本島	弥生～平安並行時代		グスク時代 12世紀～16世紀初め頃			三山時代 第一尚氏王朝時代 第二尚氏(前期)王朝時代	
宮古・八重山(先島諸島)	新里村期			中森期			
沖縄の様相	1187 陶磁器・石鍋・カムイヤキの流通 農耕が広まる	1260 舜天が初代琉球国中山王として即位したとされる	1314 英祖王統の4代目玉城が即位/この頃から三山が対立 各地に大型グスクが現れる	1350 1372 1406 1418 1421 1429 1453 尚巴志が察度王統武寧王を倒し、父・尚思紹が中山王に即位 中山王察度が明へ進貢(日本で言う勘合貿易)を始める 察度が玉城王を倒し即位(浦添按司から王となり首里へ) この頃に首里城成立?	1458 1469 1470 1500 八重山で「オヤケアカハチの乱」が起こる 金丸が尚円王と号して王位に就き、第二尚氏王統が始まる 首里城で反乱が起こり、第一尚氏王統が減じる 「護佐丸・阿麻和利の乱」/「万国津梁の鐘」を首里城正殿にかける 「志魯・布里の乱」により首里城焼失 尚巴志が南山王他魯母を倒し、三山を統一 中山王尚思紹が薨去、翌年に尚巴志が中山王に即位 尚巴志が北山王攀安知を倒す	1609 薩摩軍が侵攻し、尚享王が薩摩へ連行される(2年後帰国)	
西暦	1100年	1200年	1300年	1400年	1500年	1600年	
日本	平安時代	鎌倉時代	南北朝	室町時代	戦国	安土桃山	
中国	宋	金	元	明			
世界 中国 日本 の様相	1126 ~27 ▽靖康の変	1192 ▽陶磁器の輸出が盛んになる ◎鎌倉幕府が成立 ◎源平の対立	1274 1281 ◎モンゴルの襲来 ▽この頃に景德鎮で青花が完成	1333 1338 ◎前期倭寇の盛期 ◎室町幕府が成立 ◎鎌倉幕府が滅亡	1401 ◎室町幕府が明と勘合貿易を始める	1467 ~77 ◎応仁の乱 ◎コロンブスがアメリカへ到達 ◎イタリアルネサンスの最盛期	1573 ◎後期倭寇の盛期 ◎室町幕府が滅亡 ◎この頃に有田で磁器作りが始まる ◎幕府が島津家久に琉球を賜う ◎徳川家康が江戸幕府を開く
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> ✦ ▽ ◎ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> ⇄ ⇄ ⇄ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 世界 中国 日本 </div>							

2. 器

グスク時代に使われる器類は、地元（トクモト）の材料で作られる土器（ドクキ）をはじめ、中国産（チュウゴクサン）の陶磁器（トウシキ）など、島外産（シマソトサン）の器（ウツバ）が流通し、多く使われます。

グスク時代の前半にあたる12～13世紀頃は、交易（カウイ）の開始期にあたり、中国産（チュウゴクサン）白磁（ハクジ）、鹿児島徳之島産（カゴシマノクニノシマサン）のカムイヤキ、長崎県西彼杵半島産（ナガサキケンセイカシラノシマサン）の滑石製石鍋（カワタマシ）が南西諸島全域に流通します。

グスク時代の後半にあたる14～15世紀頃になると、交易（カウイ）の範囲が中国（チュウゴク）、朝鮮（チヨウセン）、東南アジアへと拡大し、1372年には中山王（チュウサンワウ）である察度（チヤクタク）が、朝貢貿易（チウコンバイイ）（周辺国の君主が中国の皇帝に貢物を捧げ、皇帝は賜り物を与える事）を開始します。遺跡でも、14～15世紀頃の外国産陶磁器が多く出土しますが、それは朝貢貿易が実際に行われていた証といえます。

器の用語

土器 焼物の分類中、最も原始的なものの、粘土を原料とし、600～900度で焼かれる。釉薬はなく、素地に耐火性のあるやきもの。

陶器 粘土を原料とし、1000～1200度で焼かれる。釉薬をかけるものと、かけずに焼きしめたものがある。

磁器 陶石、長石などの鉱物を原料とし、1200～1300度で焼かれる。陶器より硬く、釉薬をかけるやきもの。

釉薬 陶磁器の表面にかける液体。陶磁器を焼く時の熱により、ガラス質に変化する。

1 白磁

白色で硬質の磁器です。12世紀頃のグスク時代初期は、中国の福建省産の玉縁白磁碗（タマノヘハクジハチ）が多く出土します。玉縁とは、口縁の断面が玉（タマ）をつけたように丸く作ったものをいいます。他にも、端反白磁碗（ハタテハクジハチ）とよばれる白磁もみられます。

13～14世紀頃には、ピロースク白磁碗（ヒロースクハクジハチ）とよばれる、高台から口縁にむかって大きく内側へ曲がるのが特徴の白磁が使われ始めます。

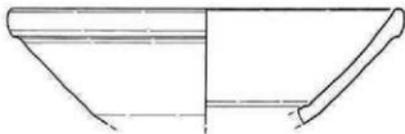


図1 玉縁白磁碗実測図（伊佐前原第一遺跡）



写真1 玉縁白磁碗（伊佐前原第一遺跡）



写真2 端反白磁碗(伊佐前原第一遺跡)



写真3 ビロースク白磁碗(新里村西遺跡)

② カムイヤキ

鹿児島県徳之島で焼かれた焼き物で、11世紀から14世紀頃まで使われていました。陶器に似ており、土器より硬いです。また、壺、鉢、碗、甕などの様々な種類がみられ、グスクや集落から出土しています。



写真4 カムイヤキ壺出土状況(普天間後原第二遺跡)

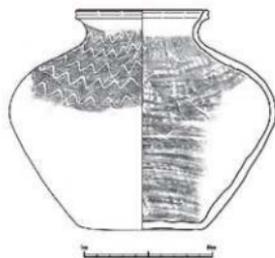


図2 カムイヤキ壺実測図(普天間後原第二遺跡)



写真5 カムイヤキ壺(伊佐前原第一遺跡)



写真6 カムイヤキ壺(稲福遺跡)

3

滑石製石鍋

石鍋と聞くと、韓国料理の石焼きビビンバの容器が思い浮かびますが、ブスク時代の沖縄本島や先島諸島では、鍋として使用されていました。

長崎県西彼杵半島を中心に採掘した滑石という石材を加工した石鍋で、九州を中心に西日本一帯に流通し、琉球列島の全域に及びました。滑石の特徴は、加工のしやすさと、保温性が挙げられます。滑石製石鍋は、4個で牛一頭の価値があったと言われており、鍋が壊れても、その破片をくぐだいて土器にまぜたりして、最後まで大事に使っていたことから、とても貴重な資源であったことがうかがえます。

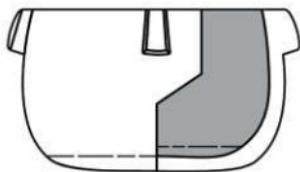


図3 石鍋のイメージ図



写真7 滑石製石鍋片(昔天間古集落遺跡)



写真8 滑石製石鍋片(伊佐前原第一遺跡)

4

鉄鍋

ブスク時代の特徴として鉄器の普及が挙げられますが、鎌や鍬などの農具のほか、調理道具として鉄鍋も使われました。土器や鉄鍋を用いて煮炊きなどの調理をしていたようです。『明実録』という中国の記録では、「琉球では絹織物より、磁器や鉄鍋を価値あるものとして重んじている」というような内容も残っています。



写真9 鉄鍋片(新里村西遺跡)



写真10 鉄鍋片(新里村西遺跡)

5 土器

1 沖縄諸島

沖縄諸島では、グスク土器とよばれる素焼きの土器が製作・使用されています。滑石製石鍋を真似ることで登場したと考えられており、石鍋のように把手や鈎をつけたグスク土器もみられます。種類は、鉢、鍋、壺を主体とした底の広い形状で、皿や碗などはあまりみられません。



写真11 グスク土器鍋（喜友名下原第二遺跡）



写真12 グスク土器鍋（伊佐前原第一遺跡）

2 宮古諸島

12世紀後半頃から野城式土器とよばれる、横耳の把手をつけた土器が作られるはじめます。この土器は、八重山諸島で使われているピロースク式土器と同時代のものと考えられています。



写真13 野城式土器鍋（高腰城跡）

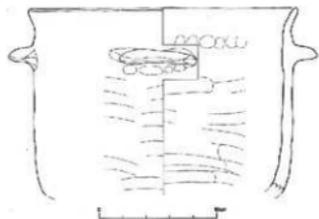


図4 野城式土器実測図（高腰城跡）

3 八重山諸島

八重山諸島では、口縁部に4つの縦耳をつけた、平たい底の鍋形土器で、滑石製石鍋を真似た新里村式土器という土器が作られます。また、新里村式土器に後続する土器に、口縁部が「く」の字に折れ曲がるのが特徴のピロースク式土器があります。時代が下るごとに土器の形は少しずつ変化していき、新里村式土器、ピロースク式土器を経て、13世紀末頃から中森式土器が作られ始めます。



写真 14 新里村式土器鍋（新里村東遺跡）



写真 15 ピロースク式土器鍋（新里村東遺跡）



写真 16 中森式土器鍋（上村遺跡）

6 青磁

青磁は、中国などで作られた表面の色が青色や緑色の磁器です。碗が多く出土しますが、皿、盤（大きな皿）、鉢も出土します。13・14世紀頃になると、青磁の出土量が増え始めていき、15・16世紀にピークを迎えます。

青磁は日常の生活用品として、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島のグスクや村などで幅広く使われていました。



写真 17 青磁碗(後兼久原遺跡)



写真 18 青磁皿(後兼久原遺跡)



写真 19 青磁碗(新里村西遺跡)

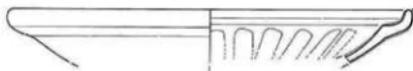


図 5 青磁鉢実測図(後兼久原遺跡)

7 褐釉陶器



図 20 褐釉陶器茶入(後兼久原遺跡)

褐色(暗い茶色のような色)の釉薬がかけられ、焼かれた陶器です。壺が多く出土し、酒などの液体や穀物を運ぶ容器や、貯蔵器として使用されたと考えられています。また、茶入れ・小壺などと呼ばれる褐釉陶器も出土することがありますが、数は多くありません。

沖縄諸島や先島諸島では、中国産、タイ産のものがみられます。



写真 21 褐釉陶器壺(新里村東遺跡)



写真 22 褐釉陶器壺(慶来慶田城遺跡)

8 青花

青花は染付とも呼ばれ、白磁の土に酸化コバルト顔料で文様を描くやきもので、白い器面に青い文様が見てとれます。沖縄で見られるものは圧倒的に中国産が多く、少しながらベトナム産が出土します。

14世紀の元代(元朝の時代)の青花は高級品とされ、主に首里城跡や勝連城跡、今帰仁城跡などのグスクから出土します。15世紀からグスク時代の終わり頃になると、明代(明朝の時代)の青花が、グスクだけでなく集落で使用されはじめます。



写真 23 青花碗(後兼久原遺跡)



写真 24 青花碗(新里元島上方台地遺跡)

コラム 形を似せた土器や陶磁器



写真 25 滑石製石鍋（左）と、それを真似た土器（中央：グスク土器 / 右：新里村式土器）



写真 26 玉緑白磁碗（左）とそれを真似たカムイヤキ（右）

いざさ
遺跡からは、違う種類なのに形が
そっくりな遺物が出土することがあ
ります。

かっせき いしなべ
滑石製石鍋を真似た土器や島外産
つぼ 真似た土器、中国産の玉緑白
磁を真似たカムイヤキが沖縄県内の
遺跡から出土しています。

当時の人々は形にも価値を見だ
していたのかもしれませんがね。



写真 27 褐釉陶器壺（左）とそれを真似た土器壺（右）

3. 食と生業

① 当時の食べ物

グスク時代には米や麦、粟といった雑穀や現在のタイモのようなイモ類を栽培し、豚や牛、鶏を飼育して食べていたと考えられ、沖縄市の仲宗根貝塚など当時の集落の跡からは炭化した米や、刃物で解体した跡が残る動物の骨が出土しています。魚や貝も食べられており、遺跡からはブダイやベラの仲間、ウツボやハリセンボンといった魚の骨や、シャコガイやサラサバテラの貝殻など現在でも食べられているものと同様海産物が出土しています。



写真1 炭化した米(仲宗根貝塚)



写真2 解体痕のある動物骨(新里元島上方台地遺跡)



写真3 魚骨(仲宗根貝塚)



写真4 貝殻(拝山遺跡)

② 当時の暮らし

グスク時代はどのようにして作物が作られていたのでしょうか。当時の遺跡からは多角形の穴の跡が列状に並んで見つかることがあります。この穴は「^{しよくさいこん}植栽痕」とも呼ばれ、農具のへらのような道具を使って植物を植えた痕と考えられています。



写真5 伊佐前原第一遺跡 植栽痕

また、宜野湾市と北谷町にまたがる^{あらですくしちかばら}新城下原第二遺跡では当時の^{すいでん}水田の跡が見つかり、水田を区画する^{あび}畔や畔に刺さった木の杭、人の足跡まで残っていました。さらに宜野座村の^{すのぞ}漢那福地川^{かんらふくちがわ}水田遺跡では谷地に水田を作った跡が発見されています。



写真6 新城下原第二遺跡 水田跡

③ 当時の道具

ブスク時代に使われた道具は、最初の頃は磨製石斧（まがひつ）など、縄文時代と変わらず石や骨、貝といった材料で作られていましたが、鉄が沖縄に入ると、丈夫で切れ味の鋭い鉄製の道具に代わっていき、刀子（とうす）や鎌（かま）、へら（へら）や鍬（くわ）、斧（おの）、鋸（のこぎり）などが登場します。

鉄でできた斧（おの）は石斧より効率よく短時間で木を切ることができました。また、刀子（とうす）は現在のナイフのような刃物で、木を削ったり肉を切ったりといろいろな用途に使われたと考えられています。



写真7 磨製石斧(後兼久原遺跡)



写真8 鉄斧(稲福遺跡)



写真9 刀子(稲福遺跡)

写真 10 鈎しり (稲福遺跡)

また、釣り針は鉄で作られ、いま私達が使う釣り針とほぼ同じ形をしています。

一方で、魚を捕まえる際に使う網の重りの多くが、タカラガイやリュウキュウサルボウ、ハイガイなどの貝殻で作られているなど、縄文時代からそのまま引き継がれたものもありました。



写真 11 釣り針 (稲福遺跡)

写真 12 貝錘かいづい (拝山遺跡)

グスク時代は、海の魚や貝、山のイノシシやドングリなどを食べていた狩猟採集の時代から、本格的に農耕や牧畜をする時代となりました。言い換えると人が自然に手を加え始めた時代ともいえます。

現在の沖縄の風景といえば一面のサトウキビ畑が一般的ですが、グスク時代の村の周りには、水田やイモ畑が一面に広がっていたのです。

4. 生活の場

グスク時代の一般の人々は、掘立柱建物ほりたてたてに住んでいました。掘立柱建物とは、地面に穴を掘り、そこに柱を立てて作った建物です。当時の集落は、掘立柱建物が集まり、高床式の倉庫が建ち、仕切りとしての柵があるような風景だったのかもしれませんが。

八重山諸島やえやまでは、集落ができた頃は石垣を持ちませんが、14～15世紀頃から石垣で屋敷を囲い始めます。

ここでは、グスク時代の人々が生活を営んだ場所について様子を感じ取ることができる遺跡を3つの地域に分けて紹介します。



写真1 グスク時代のムラを再現したジオラマ
(提供：宜野湾市立博物館)

① 沖縄諸島

◆ 伊佐前原第一遺跡いさのまへはら（宜野湾市）ぎのわん

何回か建物を建て替えたのか、柱穴の痕跡が密集してたくさん見つかっています。また、9本柱で作られた建物跡が3棟見つかりました。これは、高倉と呼ばれる高床式の穀物を貯蔵する倉と考えられています。

植物を植えた跡と考えられる場所の付近には、柵の跡と考えられる遺構も見つかっています。



写真2 多くの柱穴の痕跡

用語解説 『遺構』

遺構とは、土地に残った過去の人間活動の痕跡で、固定していて動かすことのできないものです。石垣や建物跡、植物を植えた跡などがこれにあたります。



写真3 伊佐前原第一遺跡の様子



図1 植物を植えた跡と柵の跡と考えられる遺構

ふてんまぐしぼり ぎのあん
◆ 昔天間後原第二遺跡 (宜野湾市)

グスク時代の掘立柱建物跡や、櫓の跡が見つかっています。

掘立柱建物跡は柱の並びや規模から、主屋（屋敷の中心となる建物）と高床式倉庫があったと考えられています。

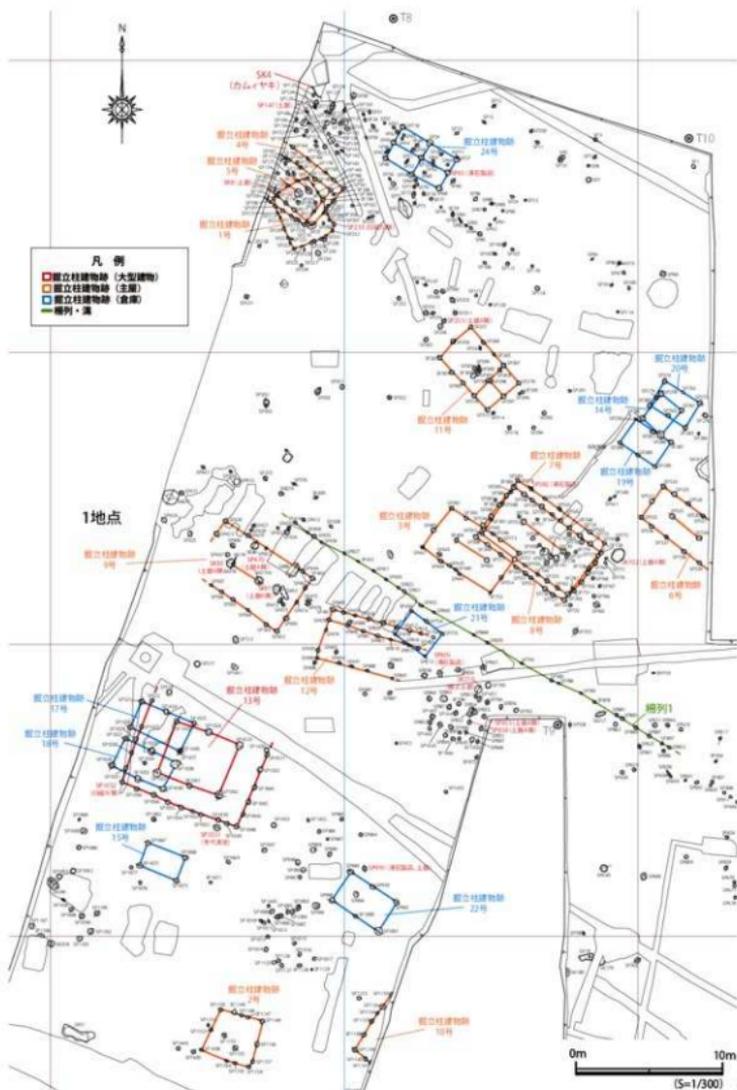


図2 掘立柱建物跡と櫓の跡の遺構図



写真4 主屋跡①



写真5 主屋跡②



写真6 高床式倉庫跡①

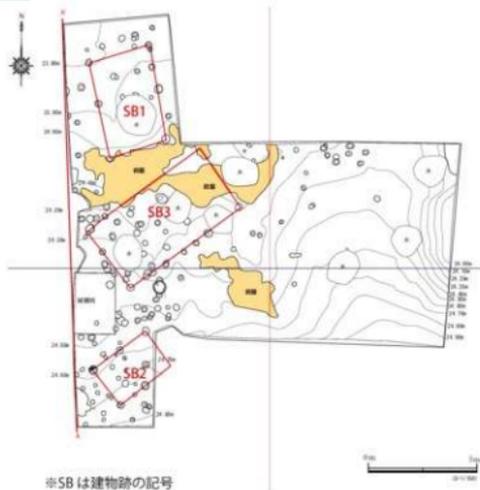


写真7 高床式倉庫跡②

◆ 喜友名下原第二遺跡 (宜野湾市)

グスク時代の集落遺跡で、平成28年度の調査ではグスク時代の掘立柱建物跡が3棟見つかります。また、円弧状遺構とよばれる、細い溝で円形を形作る遺構も見つかりました。

グスク土器の破片と石を意図的に埋めた穴も見つかり、自然科学分析の結果11世紀～12世紀のものと考えられています。どういう目的で土器を埋めたのが不明なところも多く、今後の研究が期待されます。



※SBは建物跡の記号

図3 トレンチ(調査区) | 遺構配置図



写真 8 掘立柱建物跡



写真 9 土器を埋めた穴の断面



写真 10 円弧状遺構

② みやこ 宮古諸島

◆ 新里元島上方台地遺跡 (宮古島市上野新里)

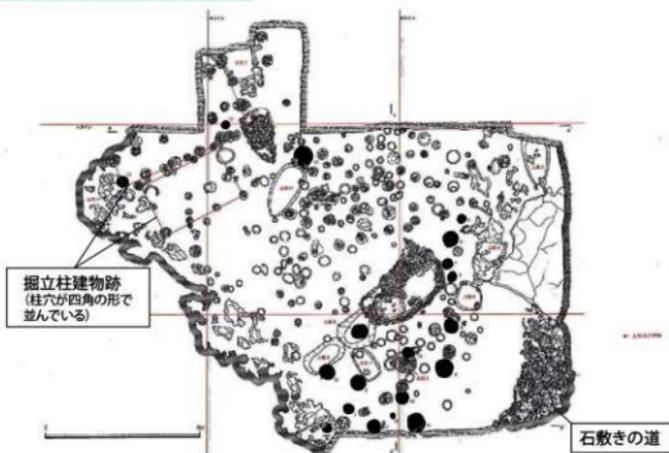


図 4 A 地区 遺構配置図

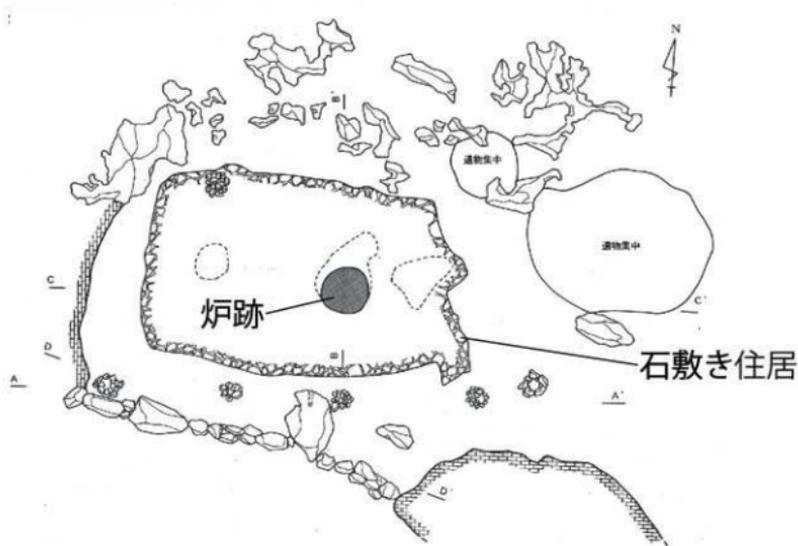


図5 B地区 遺構配置図



写真11 石敷きの道(A地区)

14・15世紀に最盛期をむかえ、16世紀頃に終わりを迎えた遺跡と考えられています。

ほつたてはし
掘立柱の住居跡や石を敷いた住居跡、
道と考えられる石敷きも発見されました。



写真12 石敷き住居 (B地区)

3 八重山諸島

◆ 新里村遺跡 (八重山郡竹富町竹富)

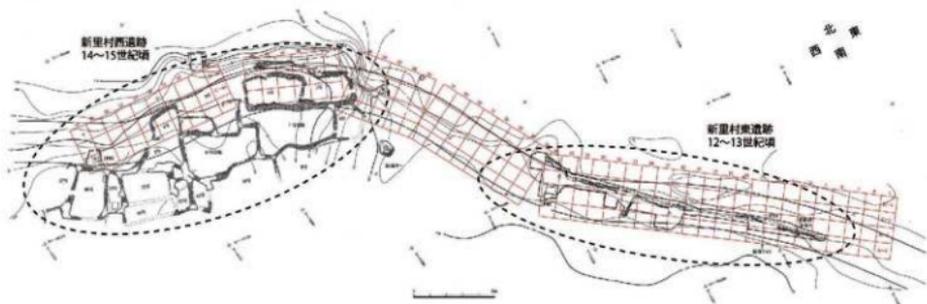


図6 新里村遺跡全体図

ハナクンガーという湧水井戸を挟んで新里村東遺跡と新里村西遺跡に分けられます(以下、東遺跡と西遺跡と呼びます)。発見された遺構や、出土する遺物の時期差を手がかりに、時期が異なる2つの集落の存在が確認されました。

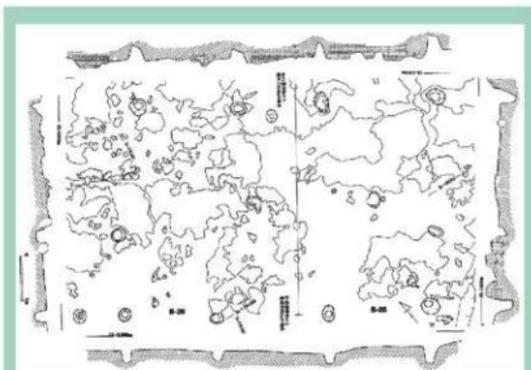


図7 新里村東遺跡 掘立柱建物跡実測図

◎ 東遺跡

12世紀～13世紀に営まれた集落遺跡で、掘立柱建物跡が見つかっています。東遺跡では、西遺跡にある屋敷を囲う石垣はみられません。



写真13 新里村東遺跡 掘立柱建物跡

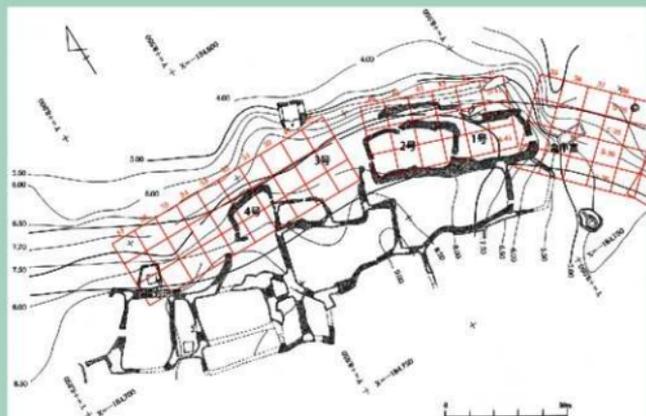


図8 新里村西遺跡 屋敷の配置図

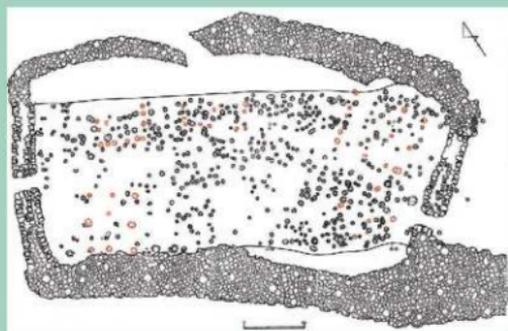


図9 2号屋敷跡 実測図



写真14 屋敷の通用門(手前が2号屋敷跡、奥が1号屋敷跡)

○ 西遺跡

14世紀～15世紀に営まれた集落遺跡で、屋敷を囲う石垣が複数つながって集落が形作られています。ひとつの屋敷を囲う石垣の範囲内からは、3～4棟の^{ぽんぽんとした}独立柱建物跡が確認されました。また、柱穴も多く確認され、何度も建て替えを行った様子がうかがえます。

発掘調査の結果、西遺跡の集落には道がほとんどなく、屋敷と屋敷が通用門(出入口)で結ばれて道として使われていたことが分かりました。

5. 飾りと祈り

古くより人々は「目に見えない邪気や病気から身を守るため」、あるいは「特殊な地位や身分を示すため」身体に装飾品をつけたと考えられています。装飾品は長い歴史の中でその意義を見出されながら、現代の私たちにとっても身近なものとして存在しています。

琉球列島のグスク時代においても、人々が身だしなみを整え、着飾る習慣のあった様子をうかがえる遺物

が出土しています。その中には着飾るためだけでなく、祈りの場で使われていたとされるものもあります。

次に紹介する装飾品が、現代でも似たようなものがないか想像しながら比べてみてください。

① 簪

簪は、日本の伝統的な装飾品の一つであり、その登場は縄文時代まで遡ることができます。

日本本土の遺跡からは、動物の骨や角、草、木、竹などを素材とした簪が出土しますが、沖縄の遺跡からは主にジュゴンやクジラといった海獣の骨を利用した簪が出土します。このような自然由来の素材を利用した簪を身につけると、それらの生命力や美しさ、呪力を得られると当時の人々は考えていたのではないかとされています。

グスク時代になると、安仁屋トウヤマ遺跡（宜野湾市）や阿波根古島遺跡（糸満市）をはじめ、複数の集落遺跡から青銅で作られた簪が出土しています。青銅製の簪は4種類あり、その頭部の形状によって次のように「男子簪」と「女子簪」に分けて使用されていました。

12世紀頃は性別によって使い分けられていた簪ですが、15世紀になると「簪の制」が定められます。この制度によって、簪の素材や頭部の形状が細分化され、身分を示す道具の一つとなりました。簪は、歴史の移り変わりをその姿形に反映してきた装飾品の一つでもあるのです。

男子簪

- 1 花や星の形をした髪挿し（本簪）
- 2 耳かさのように細くなる挿し（副簪）



写真1 髪挿し
（稲福遺跡）



写真2 挿し
（稲福遺跡）



写真3 ジーファー
（安仁屋トウヤマ遺跡）

女子簪

- 1 匙のように大きなジーファー（本簪）
- 2 その他の側挿し（添簪）

② 玉

人々の歴史的な精神活動を象徴する道具の一つに数珠が挙げられますが、数珠を構成しているのが玉です。

玉には小玉、丸玉、勾玉、白玉、管玉、甕玉、算盤形玉、滴玉、トンボ玉などの種類があり、形や大きさも様々です。またメノウ（鉱物の一種）、水晶、碧玉、翡翠、ガラスなどの舶来品や、土、貝、動物骨などを素材とするため、その組み合わせも多種多様です。特に石やガラスで作られているものは土の中でも残りやすいため、日本各地の遺跡では多くの玉が出土しています。グスク時代の集落遺跡でも丸玉や勾玉、管玉、甕玉などが出土しており、その数は



写真4 玉類（後兼久原遺跡）

グスクから出土するものを上回っています。後兼久原遺跡（北谷町）や仲宗根貝塚（沖縄市）では色とりどりの玉が出土しており、集落遺跡の中でも出土数が最多であった稲福遺跡（南城市）では、500点近くの丸玉や平玉、小玉、白玉、管玉、勾玉などが見つかります。稲福遺跡は『琉球国由来記』に記載されている「上之嶽」と推定されていることもあり、祭祀が行われる重要な場所であったと考えられています。

また、近代になると副葬品として玉を埋葬している事例も確認されています。玉が出土するグスク時代の集落遺跡は沖縄本島だけでなく、住屋遺跡（宮古島）やカンドウ原遺跡（石垣島）など広い範囲に及びます。そのため玉は装飾品として、さらに祈りの場面においても、人々にとって身近で大切なものであった様子がうかがえます。



写真5 玉類（仲宗根貝塚）



写真6 玉類（仲宗根貝塚）



写真7 勾玉（カンドウ原遺跡）



写真8 勾玉（カンドウ原遺跡）



写真9 土製勾玉（稲福遺跡）

③ その他 ゆるこう 有孔製品・垂飾 たれかざり

簪かんざしや玉類たまがたといった現在でも見かけるようなデザインの装飾品そうじゆひんの他に、グスク時代の集落遺跡しゆらくいせきからは恐らく装身具そうしんぐ、あるいは装飾品そうじゆひんであったらうと考えられるものも、いくつか出土しゅつどしています。

写真10は、拝山遺跡ひやうざんいせき（浦添市うらそえ）にて出土しゅつどした、貝製かいせいの小玉こたまです。巻貝まきかいの巻いている部分まきである螺塔らたかを円盤状えんぱんじょうに切り取り、外側の面うへや割った部分きりなどを研磨けんま調整てんせいして平らにしたものです。同じ時期しきの遺跡いせきとしては、勝連城跡かつれんじょういせきなどからも出土しゅつどしていますが、用途ようどは不明ふめいです。

写真10 貝製小玉（拝山遺跡）



写真11は、後兼久原遺跡くしやぬくばらいせき（北谷町きたやちやう）から出土しゅつどした「有孔製品しゆつこくせいひん」と呼ばれているものです。写真10の貝製小玉かいせいこたまと似ているようにみえますが、この製品はサメやエイなどの脊椎骨せきついこつを利用して作られています。

こちらの用途ようどもよくわかりませんが、グスク時代ぐすくじだいだけでなく、縄文時代じゆんもんじだいの遺跡いせきからも出土しゅつどが確認かくにんされています。

写真11 有孔製品（後兼久原遺跡）

最後に紹介する写真12の製品は、伊佐前原第一遺跡いさまへはらいせき（宜野湾市いのわんし）から出土しゅつどしたもので、漁具りしぐの鐘かねに似ている製品せいひんではあるものの、垂飾たれかざりとして使用しやうじゆされていた可能性かうねいせいが指摘さしあされています。

写真12 垂飾（伊佐前原第一遺跡）



コラム 鏡 歴史を映すもの

ほとんどの人が日々使用する生活道具の一つに鏡が挙げられると思います。その起源については諸説ありますが、水をのぞきこんだ人間が水面に映った自分の姿に驚いたという説があることから、鏡は「水かがみ」から発生したと考えられています。

考古学において最古とされている鏡は、トルコのチャタル・ヒュルク遺跡（新石器時代）から出土した黒曜石の黒光りを利用したものだとされています。時代が進むと金属、純銅、青銅でつくられた鏡がヨーロッパやアジアでも使われるようになり、中国を通して日本にも鏡の文化が入ってきました。

中国において、鏡は単なる化粧道具ではなく、物の真性を正しく映す神器とされ、辟邪（古代中国の神獣）の魔除けとしても使用されていました。青銅製の円形で背面につまみを貼り付けた中国製の銅鏡が弥生時代の日本にも伝わり、鏡をとても好んだ日本人は、中国のものを

真似て大量に製作します。古代の日本でも、鏡は中国と同様に化粧道具に限定されず、太陽祭祀や信仰に関わる呪術的に使用されていたと考えられています。

沖縄においても、グスク時代の集落遺跡である稲福遺跡から青銅製の古鏡が1点出土しています。この古鏡は花のような形をしており、背面には隆帯線と留め具が貼り付けられています。どこで誰が製作したかは不明ですが、中国系統の鏡に似ている様子もうかがえます。

この鏡も、もしかしたら誰かの姿を映していたのかもしれませんが、しかし、稲福遺跡は祭祀を行うために重要な遺跡であったと考えられているため、古鏡も日常的に使用されていたものではなく祭祀で使用するもの、もしくは副葬・神儀的なものとしての埋納品だったものであろうと考えられています。

このように鏡は人間の長い歴史において多面的に使用され、現代でも存続している道具の一つとなっています。

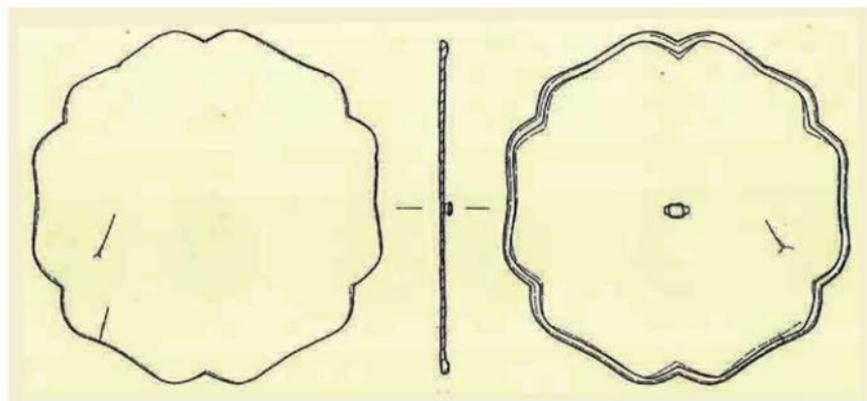
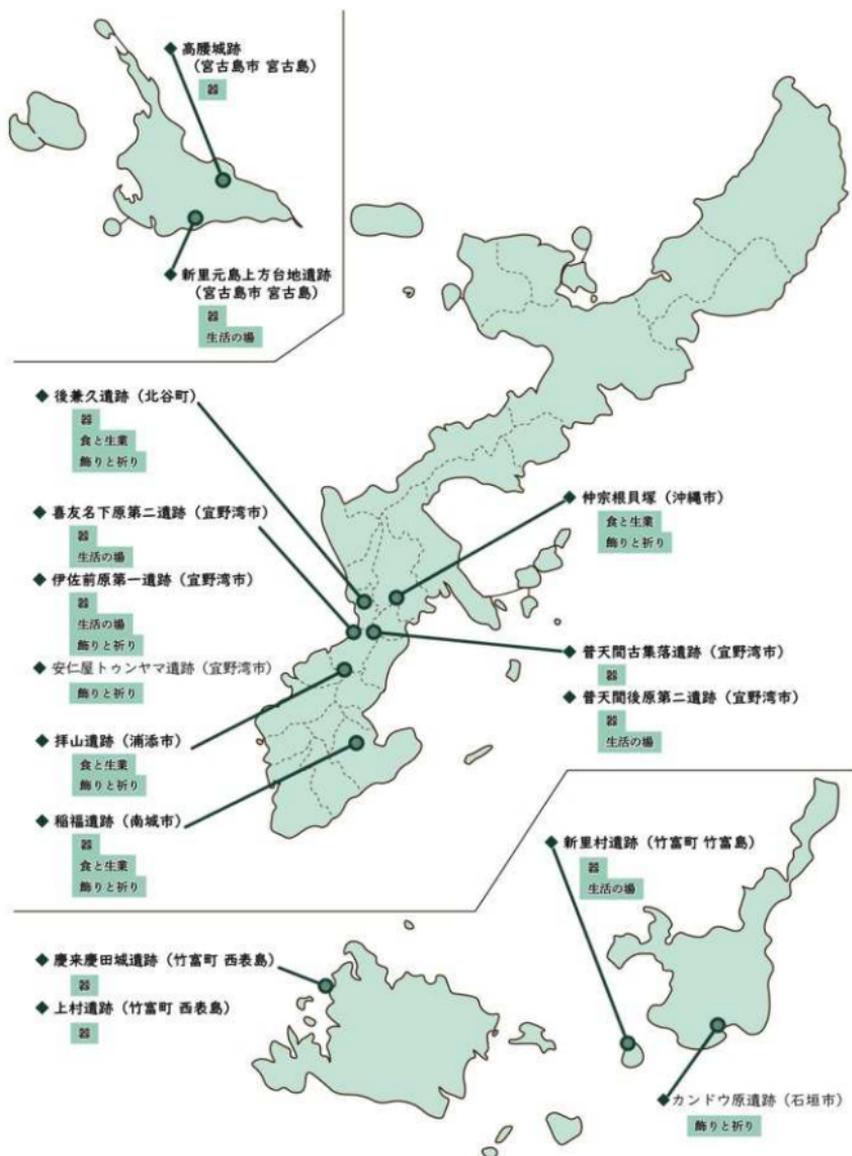


図1 青銅製古鏡（稲福遺跡）

取り扱った遺跡



引用文献

2. 器 (P4～11)

- 雄山閣編 1969 『土器』『陶磁用語辞典』雄山閣出版株式会社
 下中直人 1969 『陶器』『増補 器物辞典』株式会社平凡社
 雄山閣編 1969 『磁器』『陶磁用語辞典』雄山閣出版株式会社
 『輪奐』、『広辞苑』

参考文献

1. グスク時代とは (P2～3)

- 石垣市 2009 『石垣市考古ビジュアル版4 無土器から有土器へ—新里村期、新しい時代の幕開け—』石垣市
 宜野湾市立博物館 2018 『宜野湾探訪Ⅱ—グスク時代の「宜野湾」—』宜野湾市立博物館
 財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 資料編集室 2003 『沖縄県史 各論編2 考古』沖縄県教育委員会
 2023 『考古』沖縄県教育委員会
 宮城弘樹 2022 『ヒスカルセレクション 考古6 琉球の考古学 旧石器から沖縄戦まで』敬文舎

2. 器 (P4～11)

- 大堀皓平 2011 『column3 沖縄に持ち込まれた石—グスク時代—』『沖縄県立埋蔵文化財センター企画展 沖縄石の考古学』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021 『首里城京の内外土品展 発掘された倉庫跡』沖縄県立埋蔵文化財センター
 和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 『太宗実録 (八)』『明実録』の琉球史料 (一)』財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部資料編集室 p36
 金沢正記 1989 『沖縄における12・13世紀の中国陶磁器』『沖縄県立博物館紀要 第15号』沖縄県立博物館
 下地和定 2012 『第三章 グスク時代の宮古 第一節 新しい文化の流入』『宮古島市史 第一巻 通史編 みよこの歴史』宮古島市教育委員会
 下中直人 1984 『白磁』『玉磁』『増補 やきもの辞典』平凡社
 新里亮人 2008 『徳之島カイヤキ陶器窯跡について』『石垣市考古ビジュアル版5 陶磁器から見た交流史』石垣市
 新里亮人 2010 『コラム⑧ グスク文化開拓年代をめぐる諸問題』『沖縄県史 各論編3 古琉球』沖縄県教育委員会
 新里亮人 2018 『第2章 在地土器の変容と展開からみた南島の社会変革』『琉球王国成立前夜の考古学』同成社 p19-42
 新里亮人 2018 『第5章 徳之島における窯業生産の動向』『琉球王国成立前夜の考古学』同成社 p85-118
 泉貴之 2014 『第7章 考古資料からみた中世 第一節 石製製造と流通』『新編 大村市史 第二巻 中世編 大村市』
 盛岡誠 1989 『第5章 出土遺物 第1節 土器 第11図7』『城辺文化財調査報告書第5巻 高城城跡—範囲確認調査報告書—』城辺町教育委員会 p29
 南島輔 2017 『第3章 第4節 グスク時代 第2項 遺物』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第90巻 キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4 一書 普天間古集落遺跡、普天間後原第二遺跡—』沖縄県立埋蔵文化財センター p76
 3. 食と生業 (P12～15)
 大堀皓平 2014 『琉球列島の石器・石器石材』『琉球列島先史—歴史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』新里貴之、高宮広土編 六一書房
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『平成18年度企画展 土からあらわれた金剛製品』沖縄県立埋蔵文化財センター
 宜野湾市教育委員会 1993 『漢部福地川水田遺跡発掘調査報告書ユニバーチャル地区』『宜野湾村文化財11』宜野湾村教育委員会
 城辺亮吉 2012 『グスク時代のなほし 琉球12～16世紀』新星出版株式会社
 新里亮人 2018 『琉球王国成立前夜の考古学』同成社

4. 生活の場 (P16～23)

- 上原静 2018 『第四章 グスク時代 第7節 古瓦と建築物』『南島考古入門』沖縄考古学会編 ボーダーライン
 財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 資料編集室 2003 『沖縄県史 各論編2 考古』沖縄県教育委員会
 大城憲 2001 『西表島の遺跡』『西表島総合調査報告書—自然・考古・歴史・民俗・美術工芸—』沖縄県立博物館 p61-80
 沖縄県立埋蔵文化財センター 『平成28年度重要文化財公開 首里城京の内外土品展 憧れの青花』沖縄県立埋蔵文化財センター
 新村出編 『遺構』『広辞苑 第五版』岩波書店
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4巻 伊佐前原第一遺跡—宜野湾・北中線(伊佐—普天間)道路改良事業に伴う緊急発掘調査(Ⅲ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第90巻 キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財調査報告書4 一書 普天間古集落遺跡、普天間後原第二遺跡—』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2018 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第94巻 基地内文化財8 一書 平成27・28年度 キャンプ瑞慶覧普天間住宅地区 試掘・確認調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第7巻 新里元島上各地遺跡 新里元島遺跡 一書 遺長保上地跡(友利—上地) 道路新設改良事業に伴う緊急発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県教育委員会 1990 『沖縄県文化財調査報告書第97巻 新里村遺跡—竹富島一周道路建設に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県教育委員会
 5. 飾りと祈り (P24～27)
 沖縄県教育庁文化課 1980 『沖縄県文化財調査報告書第33巻 仲宗根貝塚』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1983 『沖縄県文化財調査報告書第50巻 稲福遺跡—上御前地区—』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1984 『沖縄県文化財調査報告書58:カンドウ原遺跡—』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1987 『沖縄県文化財調査報告書第83巻 拜山遺跡 沖縄自動車道(石川—那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1990 『沖縄県文化財調査報告書第96巻 阿波根古島遺跡 那覇—糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1992 『沖縄県文化財調査報告書第105巻 安仁屋トウヤマ遺跡—跡地跡事務所倉庫建設に伴う緊急発掘調査報告書—』沖縄県教育委員会
 沖縄県教育庁文化課 1999 『沖縄県文化財調査報告書第134巻 喜友名貝塚・喜友名グスク 宜野湾北中城線(伊佐—普天間)道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4巻 伊佐前原第一遺跡 宜野湾北中城線(伊佐—普天間)道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告書(Ⅲ)』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第22巻 後象久遺跡 米軍送油所移設に伴う緊急発掘調査』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第26巻 ナカダカリヤマの古墓群 急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第92巻 東村跡 沖縄県立難島児童生徒支援センター建設に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター
 岩田貞夫 1972 『沖縄文化史序論』東京堂出版
 江坂輝雄 渡辺誠 1988 『装身具と骨角製品製造の知識』東京美術
 岸本竹美 2003 『グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察』『沖縄埋蔵文化財センター』
 小森田一記 1978 『琉球』社会思想社
 財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室 2003 『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』沖縄県教育委員会
 下中邦彦 1985 『世界考古学辞典 上』平凡社

文化講座

- ・日時 11月6日(日)
14:00 - 15:30 (受付 13:30)
- ・定員 66名
- ・受講料 無料
- ・講師 当センター職員
奥平大貴 「グスク時代の暮らし」
廣岡凌 「暮らしの中のカムイヤキ」
- ・場所 当センター 研修室

予約受付期間

- ・日時 10月25日(火) - 10月28日(金)
10月31日(月) - 11月2日(水)
9:00 - 17:00
- ・電話での受付のみ
098-835-8752 調査班(普及担当)

沖縄県立埋蔵文化財センター

- 休 所 日 月曜日(国民の休日・慰霊の日の場合は翌平日に振替) 年末年始(12/28-1/4)
国民の休日(こどもの日・文化の日を除く) 慰霊の日(6/23) ※その他臨時休所あり
- 開 所 時 間 9:00-17:00 (入所は 16:30 まで)
- 住 所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
- 電 話 番 号 ☎ 098-835-8752 / 8751
- Web サイト [沖縄 さいふんセンター](#)